

## 清見における結果母枝と着花性

野方俊秀・江原忠彰(佐賀県果樹試験場)

NOGATA, T. and T. EHARA: Fruit-Bearing Branches of Kiyomi

タンゴール農林1号“清見”は1979年6月に品種登録され、西南暖地における有望品種としての期待が大きく高接更新を主体とした増殖が続いている。しかし、本品種は着花樹令に達するのが遅く隔年結果性が強いとされていることなど、栽培上の問題も多く生産安定技術の確立が急がれている。

## 1. 調査方法

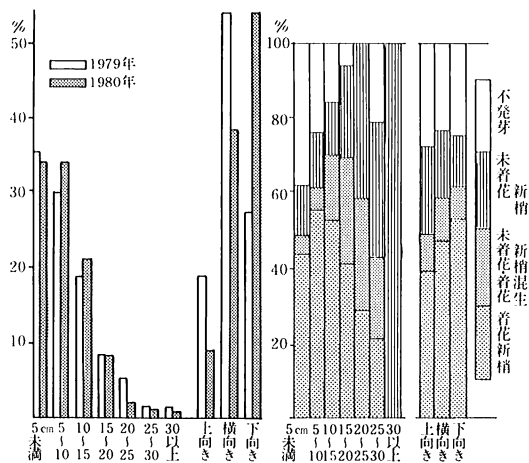
1979～1980年の2カ年にわたり、佐賀県東松浦郡浜玉町の生産農家6園の各3樹について、1樹当たりそれぞれ側枝3本を供試した。調査は結果母枝の長さや向きと着花新梢・未着花新梢の発生や結実果の状態について行った。なお、供試樹は調査初年度で高接後4年経過樹2園、6年経過樹3園、苗木定植後6年経過樹1園であった。

## 2. 調査結果及び考察

結果母枝の長さは2カ年を通じ10cm未満が全体の65%を占め、20cm以上の長さの母枝は10%にも満たず、特に1980年が短い傾向にあり、20cm以上の母枝は前年の半量

母枝は全母枝とも着花又は未着花新梢の発生がみられた。一方、母枝の向き別には各母枝とも差がみられず、約25%が発芽枝であった。これに対し、着花新梢(含直花)の発生割合は20cmの長さまでは母枝が長くなるにつれ増加するが、20cmを超えた場合は減少し、また、未着花新梢の発生する母枝の割合は母枝が長くなるにつれ増加し、特に20～25cmの長さの母枝では70%の母枝で発生した。向き別には上向き枝ほど未着花新梢の発生割合が、下向き枝ほど着花新梢の発生割合が高かった。

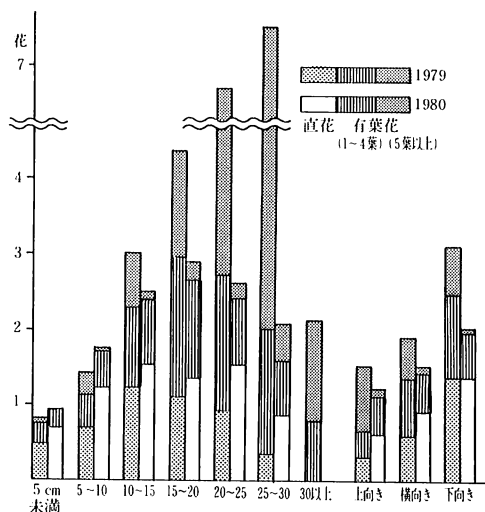
1結果母枝当りの着花数は母枝が長くなるにつれ増加し、1979年は5～10cmの母枝が1.4花着生したのに対し、15～20cmは4.4花、20～25cmは6.7花も着生していた。しかし、1980年は前年とやや異なり、10cm未満の母枝では前年を上回る着花がみられたのに対し、10cm以上の長い母枝では大きく下回り、15～20cmの母枝が2.9花と最高で、20cm以上の長さの母枝ではさらに減少していた。



第1図 結果母枝の着生割合 第2図 結果母枝と新梢の発生状況(1980)

にすぎなかった。一方、開花時における結果母枝の向きは、1979年は上向き19%、横向き54%、下向き27%の割合であったが、1980年は下向きの母枝が54%ともっとも多く、上向きの母枝は9%にすぎなかった。これは枝の誘引に加え、前年度の結実により樹全体の枝が下向きとなったことも一因かと思われる。

各供試母枝の発芽状況をまとめたものが第2図である。すなわち、母枝が短いものは不発芽枝の割合が高く、5cm未満の母枝は不発芽枝が約40%も存在し、20～25cmの



第3図 1結果母枝当りの着花新梢の発生数

着花新梢の着葉数は、母枝が長くなるにつれ葉数ゼロ(直花)の割合が減少し、有葉枝の着葉数の多いものが増加しており、1979年と1980年では後者が着葉数が少なく、直花の割合が極めて高かった。一方、母枝の向き別では上向き枝は有葉枝、下向き枝は直花の割合が高く、又、下向き枝で着花数が多くなっているが直花数の違いによる差と言えよう。

1樹内における花の着生状況は、それぞれの結果母枝

の着生割合が異なるため1母枝当りの着花数では単純に表わせない。1980年の1樹内の着花量は5～10cmの母枝に着生した花がもっとも多く、ついで10～15cm、5cm未満で、20cm以上は母枝数が極めて少ないことから全体に占める花の割合は著しく少なかった。向き別では、下向き枝が母枝数、1母枝当りの着花数が多かったことによ

第1表 1樹内における新梢の発生状況(1980)

調査項目 母枝の性状	着生・ 母枝数	着花新梢		未着花新梢		不発芽 母枝数
		発生母枝数	着花数	発生母枝数	新梢発生数	
5cm未満	337本	164本	312花	56本	72本	130本
5～10	340	208	594	70	110	80
10～15	209	145	527	66	133	34
15～20	85	58	245	44	92	5
20～25	18	11	48	13	23	0
25～30	11	5	23	6	22	2
30cm以上	2	0	0	2	4	0
上向き	87	42	105	29	59	24
横向き	374	217	565	109	181	89
下向き	539	331	1,074	119	218	139
全体	1000	591	1,745	257	456	252

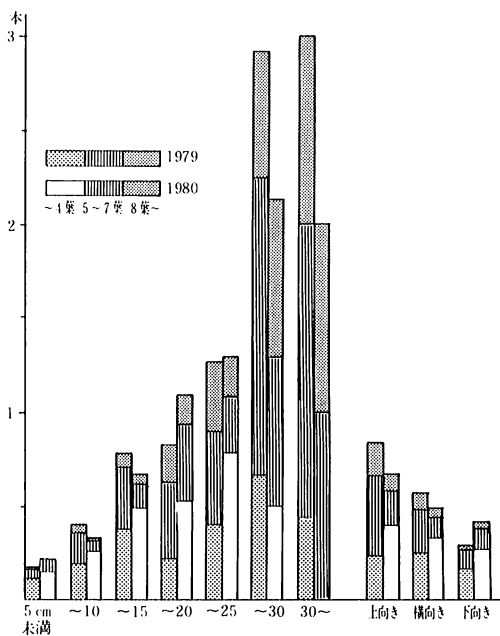
注) \* 1樹の母枝数を1000本として算出

り横向き枝の約2倍、上向き枝の約10倍量の着花数となった。これらのうち、有葉花数は10～15cmの下向き枝に着生したものがもっとも多く、ついで5～10cm、15～20cmの下向き枝の順で、直花数でも5～15cmの下向き枝で多く、全体に下向き枝が有葉花・直花ともに多く、わずかに5cm未満の長さの母枝で横向き枝が下向き枝の着花数を上回ったにすぎなかった。

1結果母枝当りの未着花新梢の発生数は、1979年度が着葉数4葉以下の新梢で次年度を下回ったものの、5葉以上の新梢では明らかに多くみられた。又、母枝の長さ別には長い母枝ほど、向きでは上向き枝ほど発生数が多く、しかも着葉数の多い新梢の発生がみられた。

1980年における1樹内の未着花新梢の発生状況は、4葉以下の新梢発生が多かった10～15cmの長さの母枝でもっとも多く、ついで5～10cm、15～20cmとなっているが、15～20cmの長さの母枝は5葉以上着生の新梢の発生が多かったため、5cm未満の母枝の割合を上回ったものである。一方、向き別には着生母枝数が多かった下向き枝から発生した新梢の割合がもっとも高く、1母枝当りの発生数が多かった上向き枝は着生母枝数が少なかったため全体の13%にすぎなかった。

結実果の着生している結果母枝の長さは、1979年度は15～20cmの母枝が32%ともっとも多く、30cm以上の長い母枝にも着果していた。これに対し、1980年度は全般に短い母枝での着果が多く、5～10cmの母枝の35%を最高に15cm未満の長さで80%を占め、25cm以上の母枝では全く着果していなかった。着果の部位は2ヵ年を通じ母枝



第4図 1結果母枝当り未着花新梢の発生状況

第2表 結果母枝の状態と着果の割合(%)

結果母枝の長さcm	着果率(%)						
	~5	~10	~15	~20	~25	~30	30以上
1979年	2.4	22.8	21.1	32.5	9.8	9.8	1.6
1980	14.3	35.7	27.6	17.3	5.1	0.0	0.0
母枝上の着果部位	~0.4	0.5	0.6	0.7	0.8	0.9	1.(先端)
1979	5.7	2.4	6.5	11.4	26.0	5.7	42.3
1980	3.0	5.1	6.1	4.1	12.2	9.2	60.2
結果枝の葉数	0	1~2	3~4	5~6	7~8	9~10	11以上
1979	17.1	27.6	21.1	25.4	4.9	2.4	1.6
1980	41.8	26.5	20.4	10.2	1.0	0.0	0.0

の最先端節位にもっとも多く、1母枝上の先端部が約85%が結実していた。又、1979年は約半数以上が5cm以上の結果枝であったが、1980年は30%以下と少なく、15cm以上の結果枝も前年度が11%存在したのに対し全くみられなかった。これは結果枝の葉数とも関連し、1979年は83%が有葉果であったのに対し1980年は58%に減じ、特に葉数の多いものが減少した。なお、着花数に対する結実果の割合(着果率)は1979年にくらべ1980年は直花の割合が高かったためか低下しており、前年の平均9.2%に対し4.8%と極めて低い着果率となった。

以上、結果母枝が下向きとなった場合は着花は多いが直花の割合が高くなり、未着花新梢の発生が極めて少なくなる傾向がみられ、連年結果のためには必ずしも有利とばかりは言えない。また、下垂枝は重なり合いやすく、日照不足のために生ずる不発芽枝の割合の増加の恐れがあり、今後、消見にあった樹姿をつくり出すための整枝剪定法の検討が重要になるとと思われる。